

## À inf. と代名詞 y

谷 口 千賀子

### 0. はじめに

代名詞 y は文中で間接目的補語となる「à + もの・ことを表す名詞(句)<sup>(1)</sup>」(以下, à+N)を受ける。

(1) J'ai répondu à son mail. → J'y ai répondu.

これ以外にも y は文の主動詞に従属する「à + 不定詞<sup>(2)</sup>」(以下, à+inf.)を受けることもある<sup>(3)</sup>。

(2) Il arrive à lire le japonais. → Il y arrive.

ところが用例を観察すると, à+inf. の場合には à+N の場合と異なり, y による代名詞化が不可能な場合のあることがわかる<sup>(4)</sup>。

(3) Il commence à travailler. → \*Il y commence.

Pinchon (1972) でも「動詞を代名詞で受けるのは名詞を代名詞で受ける場合ほど厳密ではない (p.194)」と指摘されているように, à+inf. は常に y によって代名詞化することができるわけではない。

代名詞 y については, Grevisse(1988)や Robert(2008), *Le Trésor de la Langue Française informatisé* (TLF) などを見ても, 「y は à+inf. に代わることもある」程度の記述に留まり, y による代名詞化の認められない場合のあることや, どのような場合に y による言い換えが可能なのかについては一切触れられておらず, 我々の知る限り, à+inf. の代名詞化に関する先行研究は皆無である。

上で見た (2), (3) は, 同じ V+à+inf. という構文を持ちながら, 一方では y による代名詞化が可能であり, もう一方では不可能である。この代名詞

化にかかわる差異は何によるのであろうか。

本稿では à + inf. の y による代名詞化がどのような制約によって阻まれるのかを明らかにすることを目指す。そのために我々はまず Réquédat (1980) に挙げられた V + à + inf. の構文を取る 131 動詞<sup>(5)</sup>について、à + inf. の y による代名詞化の可能性をインフォーマント調査した<sup>(6)</sup> (1 章)。これらの調査結果をもとに、統辞的制約と意味的制約の二つの側面から à + inf. の代名詞化を阻む要因を明らかにする (2 章)。

## 1. 調査結果

à + inf. の y による代名詞化を妨げる要因を知るために、我々は Réquédat (1980)<sup>(7)</sup>で提示されている V + à + inf. の構文を持つ動詞のうち、verbes causatifs de sentiments (27 動詞<sup>(8)</sup>)、verbes d'effort (11 動詞<sup>(9)</sup>)、déroulement du procès (13 動詞)、verbes d'incitation (23 動詞) とその他の動詞 (19 動詞<sup>(10)</sup>)、さらに巻末に挙げられた不定詞を導く 467 動詞のうち、à + inf. の構文を持つ 38 動詞<sup>(11)</sup>、の計 131 動詞を対象に調査を行った。その調査結果は以下のとおりである。

### – verbes causatifs de sentiments

y による代名詞化が可能なもの : s'amuser, se délecter

y による代名詞化が不可なもの : s'abrutir, s'affoler, s'attrister, se chagriner, se consoler, se désespérer, se détendre, se divertir, s'émerveiller, s'émouvoir, s'énervier, s'ennuyer, s'exaspérer, se fatiguer, s'inquiéter, s'irriter, se lasser, se passionner, se reconforter, se réjouir, se révolter, se scandaliser, se tuer

判断の分かれたもの : s'abêtir, s'épuiser

(4) Je m'amuse à lancer des pierres dans l'eau. → Je m'y amuse.

(5) Il s'abrutit à travailler comme ça. → \*Il s'y abrutit.

このグループの動詞はすべて一般的には「cela + V + COD (人) + de + inf.」

の構文で用いられることが多く、「se 動詞」構文は非常に文語的で日常的にはあまり用いられないものが多いようである。

– verbes d’effort

このグループに含まれる動詞においては、すべて y による代名詞化が可能であった。

s’acharner, s’affairer, s’appliquer, s’astreindre, s’attacher, s’égosiller, s’employer, s’essayer, s’évertuer, s’ingénier, s’obstiner

(6) Il s’acharne à *finir son devoir*. → Il s’y acharne. (Réquédat 1980 : 23)

(7) Il s’évertue à *faire une bonne impression*. → Il s’y évertue. (*ibid.*)

– déroulement du procès

y による代名詞化が可能なもの : se préparer, se mettre

y による代名詞化が不可なもの : hésiter, répugner, continuer, commencer, tarder, persévérer, se prendre

判断の分かれたもの : s’apprêter, se disposer, persister, s’entêter

(8) Il se met à *travailler*. → Il s’y met.

(9) Il tarde à *partir*. → \*Il y tarde.

Pinchon (1972) では、déroulement du procès にかかわる動詞が導く à + inf. は y で受けることができないと指摘されている (pp.219–220, 230) が、我々の調査によれば必ずしもそうではないことがわかる。

– verbes d’incitation

このグループの動詞は、V + COI (人) + à + inf. の構文のもの (2 動詞<sup>(12)</sup>) と、V + COD (人) + à + inf. の構文のもの (21 動詞) とに分かれる。COD を導く場合には à + inf. の y による言い換えは可能であるが、COI を導く場合には不可能なようである。また、代名詞化が可能な場合にも統辞的に制約があるようだ。これについては 2.1.3. で詳しく見ることにする。

V + COI (人) + à + inf. : apprendre, enseigner

V + COD (人) + à + inf. : aider, amener, astreindre, autoriser, condamner, conduire, contraindre, convier, décider, déterminer, encourager, engager, exhorter, entraîner, forcer, inviter, inciter, mettre, obliger, pousser, réduire

(10) Je lui ai appris à *chanter*. (Réquédat 1980 : 39) → \*Je lui y ai appris.

(11) Je l'aide à *faire ses devoirs*. → Je l'y aide.

－その他（巻末の 38 動詞を含む）

y による代名詞化が可能なもの : s'abaisser, aboutir, s'accoutumer, arriver, s'attarder, s'attendre, attraper, s'autoriser, s'aventurer, se complaire, se consacrer, consentir, se contraindre, contribuer, se décider, s'habituer, s'obliger, parvenir, penser, se plaire, prendre, se refuser, se réhabituer, se remettre, repenser, se résoudre, réussir, se risquer, songer, surprendre, tenir, trouver, s'user, veiller

y による代名詞化が不可なもの : avoir, chercher, consister, demander, se déterminer, se distraire, s'empoisonner, être là, s'exciter, s'extasier, faire, s'opiniâtrer, rechercher, recommencer, redonner, renoncer, rester, rêver, servir, venir

判断の分かれたもの : revenir, suffire, tendre

(12) Tiens, je t'attrape à *voler des gâteaux* ! → Tiens, je t'y attrape !

(13) J'ai à *vous parler*. → \*J'y ai.

## 2. 調査結果の分析

### 2.1. 統辞的制約

#### 2.1.1. V + à + N の構文を持たない動詞の場合

以上, 131 動詞を調査した結果, à + inf. の y による代名詞化には明らかな統辞的制約のあることがわかった。

まず, 間接目的補語として à + N の構文を持たないすべての動詞において,

à + inf. の y による代名詞化は容認されない。

- (14) Je m'inquiète à *les savoir sur les routes*. (Réquédat 1980 : 20)

→ \*Je m'y inquiète.

[s'inquiéter *de N* : On s'inquiète beaucoup *du réchauffement de la planète*.]

- (15) Il s'extasie à *parler devant un public*. → \*Il s'y extasie.

[s'extasier *sur N* : Je me suis extasié *sur la beauté de cette actrice*.]

Pinchon (1972) では、外国語としてのフランス語学習者向けテキストの記述を引用し、de + 不定詞と代名詞 en との関係を、「de に導かれる不定詞は、その不定詞が de に導かれる名詞に相当するときのみ en によって置き換えが可能である」と説明する (p.233)。

- (16) Je suis content *de ma composition*.

Je suis content *d'avoir écrit ma composition*. → J'*en* suis content.

(Pinchon 1972 : 233)

これは、逆に言うなら、de + N の構文を持たない動詞の場合には de + inf. を en で代名詞化することができないということになる。我々の調査から、これと同様のことが à + inf. を用いる際にも起きているのではないかと考えられる。

特に顕著にこの制約が見てとれるのが、名詞 (句) の場合には前置詞を伴わない直接目的補語を要求する動詞の場合である。

- (17) Il commence *ce travail*.

Il commence à *travailler*. → \*Il y commence.

- (18) Il continue *ce travail*.

Il continue à *travailler*. → \*Il y continue.

Pinchon (1972) も、このように目的補語が名詞 (句) の場合と不定詞の場合とで統辞的構造が異なる動詞を、à + inf. の代名詞化が不可能である場合のひとつとして挙げている。Pinchon (1972) によれば、この場合、不定詞は代名詞化することなく省略されるか、le faire や cela<sup>(13)</sup>で言い換えるしかないという (p.219)。

(19) Le jardinier a-t-il taillé les arbres?

- a. Il a commencé hier.
- b. Il a commencé à le faire hier.
- c. Il a commencé cela hier. (Pinchon 1972 : 219)

この代名詞化できないという点について、Yaguello (1998) では、いかなる代名詞も用いることができないため、代名詞化しないことを選択する場合のあることが指摘されている。

Yaguello (1998) によれば、一般に、左方転移文において、左方転移された要素は後続文の中に代名詞の形で再び現れる。たとえば直接目的補語が左方転移される場合、「個別化」できるものは直接目的補語代名詞によって、「個別化」できないものは *ça* によって示される (pp.35-37)。

(20) *Natacha, je l'aime.* (Yaguello 1998 : 35)

(21) *Le chocolat, j'aime ça.* (*ibid.* : 36)

ところが性別を持たない町の名前などが左方転移されるときには、直接目的補語代名詞によっても、*ça* によっても受けることができない。町の名前は「個別化」できるため、*ça* ではなく、直接目的補語代名詞を用いるべきであるが、性がわからないものを性数の区別のある直接目的補語代名詞によって代名詞化することができないためである (p.38)。

(22) a.\* *Paris, je l'aime.*

b.\* *Paris, j'aime ça.* (*ibid.* : 38)

このようなときに選択されるのが、何によっても受けないという手段だと言う (p.39)<sup>(14)</sup>。

(23) a. *Bréhat, j'aime.*

b. *Paris, je connais.* (*ibid.* : 39)

このことは (17), (18) の *commencer, continuer* の場合にも当てはまるのではないだろうか。動詞 *commencer, continuer* は人を主語とする時、直接目的補語として名詞 (句) N (*ce travail*) を必要とする動詞である。この N は直接目的補語代名詞によって代名詞化することができる。ところが *commencer* が不

定詞を従えるときには、この不定詞は前置詞 à により、「間接的に」動詞に従属する (à travailler) こととなる。この à + inf. は意味価値としては直接目的補語 N と同等の価値を持つにもかかわらず、統辞的には構造がまったく異なっている。この「間接的に」従属した不定詞はもちろん直接目的補語代名詞によっても、また直接目的補語と解釈することのできない y によっても代名詞化は不可能である。このような意味的価値と統辞的構造の矛盾によって、à + inf. を代名詞化しないという選択がなされるのであろう。

フランス語話者の言語感覚において、他動詞構文でまず名詞 (句) N による構文が優先されるのは、インフォーマント調査によっても明らかであった。あるインフォーマントは、Il commence à travailler. を代名詞を用いて言い換えようとして、瞬時に Il le commence. と答えた。また次の例でも、

(24) Je m'attriste à les entendre parler de la sorte.

Je m'y attriste. は容認できないが、à + inf. の構文にもかかわらず Je m'en attriste. なら可能であるという回答もあった。これは s'attrister de N の構文が à + inf. の構文より強く意識されているためにほかならない。

### 2.1.2. 自動詞の場合

à + inf. の y による代名詞化は、本来自動詞として用いられる動詞の多くでも容認されない。consister, hésiter, persévérer, persister<sup>(15)</sup>, tarder などである。

(25) Leur travail consiste à soigner des malades. → \*Leur travail y consiste.

(26) Il hésite à dire la vérité. → \*Il y hésite.

Pinchon (1972) によれば、これらの動詞は統辞的に不定詞しか導くことのできない動詞であり、これらの動詞に従属する不定詞は代名詞化することができず、何によっても受けないか、le faire によって言い換えるしかないという (p.219)。

(27) S'engagera-t-il dans cette voie?

Il hésite. / Il hésite à le faire. (Pinchon 1972 : 219)

そもそも自動詞は目的補語を持たない動詞である。この補語を持たないとい

うことと、間接目的補語的に従属する à + inf. の間に矛盾が生じ、à + inf. の代名詞化が妨げられるのではないかと考えられる。つまり 2.1.1. で見たように、何によっても受けないという手段が取られるわけである<sup>(16)</sup>。

ところで、à + inf. の構文を持つ動詞の特徴として、「se 動詞」の形で用いられるものが非常に多いことが挙げられる。元々他動詞構文を持つ動詞を含む「se 動詞」の組み合わせが自動詞的に用いられる場合が多い。特に今回の調査では、1 章で *verbes causatifs de sentiments* に分類されたほとんどの動詞で à + inf. を y によって代名詞化することができなかった。「se 動詞」構文を用いることで「自動詞的に」ふるまう動詞の多くにおいても、上で見た自動詞の場合と同様のメカニズムが働いているとみなすことのできる場合もあるが、「se 動詞」については à + inf. の y による代名詞化を容認するものも多く、さらなる調査が必要である。

### 2.1.3. V + COD (人) + à + inf. / V + COI (人) + à + inf.

1 章で見た *verbes d'incitation* に含まれる動詞は、V + COD (人) + à + inf. の構文を取るものと、V + COI (人) + à + inf. の構文を取るものに分かれる。1 章でも触れたように、COD を導く場合には à + inf. を y で代名詞化することが可能であるが、COI を導く場合には不可能なようである。

(28) Il m'a autorisé à partir demain. → Il m'y a autorisé.

(29) Elle lui a enseigné à dessiner. (Réquédat 1980 : 39)

→ \*Elle lui y a enseigné.

Pinchon (1972) では、名詞 (句) と不定詞という 2 つの補語を従える動詞においては、これらの補語を代名詞化する場合、不定詞を代名詞化したものが省略されることのあることが指摘されている (p.229)。

(30) Il veut apprendre le latin. Tu l'aideras. / Tu l'y aideras. / \*Tu y aideras.

(Pinchon 1972 : 229)

ところで、y による代名詞化が容認されない (29) は、y を省略すると容認される。



(31) Elle lui a enseigné à dessiner. → Elle lui a enseigné.

インフォーマントによれば、Elle lui y a enseigné. の場合には y を à dessiner と解釈するよりも、場所を表す代名詞 y と解釈したくなるとのことであった。すでに間接目的補語代名詞 lui が存在している以上、à dessiner は間接目的補語的形態を持ちながらも、直接目的補語の役割を果たさなければならない。実際、à dessiner を代名詞 le で受け、Elle le lui a enseigné. は問題なく容認される。ただしこれについてはおそらく、à+inf. を「例外的に」le で受けていると考えるよりは、2.1.1. で見たように、名詞（句）N による構文（enseigner à qqn qch）が優先されていると考えるべきであろう。このように、直接目的補語が要求される場面において、代名詞 y が現れるという矛盾を解消するために、à+inf. を代名詞化しないという手段が取られ、y が省略されることであいまいさが解消し、容認度が上がる結果となるのではないだろうか。

(28) のように COD を導く際の à+inf. の y による代名詞化は問題ないが、この場合にも y を省略することが可能である。

(32) Il m'a autorisé à partir demain. → Il m'a autorisé.

また、我々の調査によって、COD または COI と à+inf. が同時に文の構成素となるこれらの構文では、COD または COI が代名詞でないとき、y の使用の容認度が下がることがわかった。

(33) Je l'ai encouragé à rester.

→ Je l'y ai encouragé. / Je l'ai encouragé. / ??J'y ai encouragé Pierre.

(34) Je lui ai appris à chanter.

→ \*Je lui y ai appris. / Je lui ai appris. / \*J'y ai appris à Pierre.

## 2.2. 意味的制約

このように統辞的制約によって代名詞 y の使用が認められない場合があると同時に、意味的制約によって y の使用が容認されないこともある。

代名詞 y はラテン語の *ibi* 「ここ」を語源とし、TLF でもまず最初に場所を表す副詞的代名詞としての用法が挙げられていることからわかるように、y

が真っ先に場所を連想させる代名詞であることは確かである。

場所を表す副詞的代名詞であると同時に、これまで見てきたように、à + inf. を照応する機能を持つ代名詞 y であるが、文の自動詞の持つ意味によって、y が場所を表すことを強く想起させる場合には à + inf. を照応する代名詞として用いることが困難になることがある。

(35) a. Il se dispose à partir. → ??Il s'y dispose.

b. Il se prépare à partir. → Il s'y prépare.

この例の se disposer と se préparer はどちらも同等の意味で用いられ、統辞的にもまったく同じである。しかしながら一方では y が容認されにくく、もう一方では y の使用が可能であると判断される。これは、(se) disposer が元々「並べる」「配置する」といった意味を持ち、事行 disposer の実現にはなんらかの場所の存在を強く連想させることから、se disposer とともに用いられる y が à + inf. より場所の解釈を優先させる傾向にあるためのようだ。

次の例においても、

(36) J'ai surpris Marie à pleurer sous la saule. (Réquédat 1980: 59)

→ J'y ai surpris Marie.

インフォーマントによれば、この場合 y は à pleurer を指示するというよりは、sous la saule を指すと解釈されやすいという。このことから、y が場所を表す語（句）と結びつきやすい傾向にあることがわかる。

反対に、y が場所の解釈を優先させる傾向にあるために、à + inf. を照応する代名詞として用いることが可能となる場合もある。2.1.2. で見たように、自動詞の多くで à + inf. の y による代名詞化が容認されない。しかし、不定詞によって示される事行への「到達」や「達成」を目指す意味を持つ自動詞 (aboutir, arriver, parvenir など) の場合、à + inf. がその「到達地点」や「達成地点」といった概念的な「場所」を表すと解釈され、y による代名詞化が可能となる。

(37) Sa vie déréglée aboutit à ruiner sa santé. → Sa vie déréglée y aboutit.

(38) Elle est parvenue à le convaincre. → Elle y est parvenue.

### 3. おわりに

このように、à inf. の y による代名詞化は、統辞的制約や意味的制約によって妨げられることがわかった。

まず統辞的には、à + N の構文を持たない動詞の場合や多くの自動詞の場合に、à + inf. を y によって代名詞化することができない。また、人を表す N と à + inf. の 2 つを構成素とする構文においては、N が間接目的補語の場合に y の使用が不可となる。

意味的制約としては、y が場所を表す副詞的代名詞と強く意識されるために、à + inf. の y による代名詞化が妨げられることが挙げられる。それゆえ、なんらかの場所を連想させやすい事行であったり、文脈の中に場所を示す要素が含まれている際には、y の使用が容認されにくかったり、y が à + inf. を照応すると解釈されにくいことがある。

これ以外にも代名詞 y の使用には、地理的要因も影響するようである。ブルターニュ地方では他の地方と比べ y が多用される傾向にあり、今回の調査においても、ブルターニュ地方出身のインフォーマントにとっては容認可能な例がより多かったようである<sup>(17)</sup>。

今回は à + inf. を導くほんの一部の動詞について調査したにすぎない。今回調査の対象とならなかった他の動詞の場合を観察することにより、ここで明らかにした制約が確かに有効であることを確認することが必要である。

#### 注

- (1) 代名詞 y は「à + 人を表す名詞 (句)」を指すこともあるが、à に導かれるのが人を表す名詞 (句) か「もの」や「こと」を表す名詞 (句) かという議論は本稿の内容に関係しないので、ここではもっとも一般的な規則である「à + もの・こと」を表す名詞 (句)」と示すにとどめる。
- (2) 厳密には不定詞そのものだけでなく、その不定詞に付随する直接・間接目的補語、状況補語などを含むことがある。また Pinchon (1972) によれば、代名詞は、

先行文脈の中に現れる具体的な動詞（句）以外にも、先行文に含まれる事行から想定することができ、（動詞でなく）名詞によって提示される概念（a）や、文脈から想定できる事行（b）などもその指示対象とすることが可能である。このように既出の語（句）そのものを受けない代名詞の用法はアカデミー・フランセーズによって批判されているが、すでに 17 世紀には頻繁に見られている（pp.194–199）。

(a) Je vous fait deffence, par l'autorité que j'ay en main, de me marier que je n'y sois présent en personne. (y : que je ne sois présent *au mariage* (イタリックは著者)) (Furetière, in Pinchon 1972 : 197)

(b) Que si elle l'envoyait en message, elle y mettoit une journée. (y : à aller en message) (Sorel, in Pinchon 1972 : 199)

本稿ではこれらすべてを含めて「不定詞」とする。

- (3) 他に、「à ce que 節」を受けることもある。

Diana s'intéresse à ce que fait Adrien, elle s'y intéresse beaucoup.

(Robert 2008 : 80)

- (4) à+N を y 以外の代名詞によって受けることもある。西村 (1997) では、à+N が代名詞化されるとき、y, lui (leur), à lui (à elle, à eux, à elles) の 3 つの異なる形をとる可能性を「自立性」という概念を用いて論じている。いずれにせよ、à+N は常に代名詞化が可能であるのに対し、à+inf. は後に見るように、いかなる代名詞によっても受けることができない場合がある。
- (5) Réquédât (1980) で取り上げられている動詞のうち、avoir や être を用いた表現 (avoir du mal, être agréable など)、TLF で à+inf. の構文の存在が確認できなかったもの、およびインフォーマントによって言葉のレベルが適当でない、あるいは à+inf. の構文が統辞的に奇妙だと判断された動詞は除外した。
- (6) インフォーマントは例文によって 2~4 人。特に Université Paul-Valéry Montpellier の Valentine Gortana 氏からは調査中や調査後の再三にわたるやり取りを通して多くの貴重な示唆を受けることができた。
- (7) Réquédât (1980) では、de または à を伴って不定詞を導く動詞と不定詞を直接導く動詞について、その統辞的・意味的特徴を分析している。
- (8) Réquédât (1980) が挙げているのは 29 動詞。そのうち 2 動詞はインフォーマントによって言葉のレベルが非常に低く分析の対象として適当ではないと判断されたため除外した。
- (9) Réquédât (1980) が挙げているのは 14 動詞。そのうち 3 動詞は他の項目にも重複して含まれているので除外した。
- (10) Réquédât (1980) が挙げているのは 22 動詞。そのうち他の項目に含まれるものと言葉のレベルが低いいため分析の対象として適当でないと判断された 4 動詞を除

き、別項目に含まれていた 1 動詞をここに含めた。

- (11) Réquédat (1980) が挙げているのは 45 動詞。そのうち TLF で à+inf. 構文の存在が確認できなかった 4 動詞と他の項目にも含まれていた 1 動詞、インフォーマントによって à+inf. 構文を取るのが奇妙だと判断された 2 動詞を除外した。
- (12) Réquédat (1980) ではここに donner を加えて 3 動詞とし、次のような例を挙げている (p.39)。
 

Je lui ai donné un exercice à faire. / Je lui ai donné à faire un exercice.

 しかし最初の例の à faire は動詞 donner の補語とはみなされにくいであろうし、後の例はすべてのインフォーマントによって不自然だと判断されたため、ここでは donner を除外した。
- (13) cela が果たして厳密には à+inf. の言い換えと言えるかどうか疑問である。
- (14) 秋廣 (2005, 2013) によれば、たとえ目的補語が表示されなくても、「欠落」した目的語  $\emptyset$  は直接目的補語のひとつの特殊な実現のされ方であり、他動詞としての構文は保たれる。例 (23) の「欠落」した目的補語  $\emptyset$  は、「談話の中で既に登場したある名詞句を何らかの談話文法的な理由で、目的語としては繰り返さないで「欠落」させてしまう場合」にあたる、照応的用法と解釈できる (cf. 秋廣 2013: 140)。このように秋廣 (2005, 2013) では、 $\emptyset$  を代名詞 le, la, les, ça と同様の照応的機能を持つ要素の一つと捉え、 $\emptyset$  が現れる場合にも他動詞のヴァランス構造が保たれているとしている。
- (15) persister は Pinchon (1972) でも à+inf. の代名詞化を容認しない動詞のひとつとされているが、我々のインフォーマント調査では、4 人中 1 人が y persister を容認した。
- (16) y による代名詞化を容認する一部の自動詞 (aboutir, arriver など) については 2.2. で見る。
- (17) このような指摘がインフォーマントよりあったが、今回の調査はあくまでも標準的フランス語を対象としており、一地方における特殊性は排除している。

## 参考文献

- GREVISSE, M (1988), *Le bon usage*, 12<sup>e</sup> édition, Duculot.
- Le Trésor de la Langue Française informatisé.*
- PINCHON, J. (1972), *Les pronoms adverbiaux En et Y*, Librairie Droz.
- RÉQUÉDAT, F. (1980), *Les constructions verbales avec l'infinitif*, Hachette.
- ROBERT, J-M. (2008), *Savoir-faire grammaire du français langue étrangère, niveau intermédiaire*, Ellipses.
- YAGUELLO, M. (1998), “Bréhat, je l’aime”, *Petits faits de langue*, Seuil : 35–39.
- 秋廣尚恵 (2005) 「直接目的補語のゼロ化」『フランス語学研究』39 : 44–58.

秋廣尚恵（2013）「目的語の「省略」・「消去」をめぐる2つの言語のタイポロジー——日仏対象言語学的視点からの考察——」『フランス語をとらえる フランス語学の諸問題Ⅳ』三修社：138–152.

西村牧夫（1997）「間接補語 *y* vs *à lui* vs *lui*」『フランス語を考える フランス語学の諸問題Ⅱ』三修社：112–122.

（文学部非常勤講師）